

Money 禍の観点から見た *Huckleberry Finn*

那 須 頼 雅

序

Mark Twain くらい誰憚ることなく思うことを存分に書きまくり、何もかも洗いざらい打ちまけた作家も少なからう。それなのにどういうわけか、sex については彼独得の、あの筆の冴えが見られないどころか、とくに sex のことを取りたてて書こうとしなかった。この欠陥を見抜いて、作家としての Twain の限界を突く批評家の攻撃を交し、Justin Kaplan は “he (Mark Twain) did write a kind of pornography of the dollar.”¹ と述べて一蹴した。Kaplan によれば Twain は人間の sexual desire をあらわに誇張して描く “sex ポルノ”² はあえて手掛けなかったものの、人間誰しもがそなえ、それでいてひた隠しに隠す money-lust を鋭くえぐる “money ポルノ” を創作したというのだ。

この Kaplan の新鮮な反論に触発され、Twain の数多くの作品の中でも最も多く批評家に取り上げられ、熱っぽい論議が交わされた作品 *Huckleberry Finn* をとくに取り上げ、この古典作品にどれほどこの “money ポルノ” 作家としての Twain の面目が躍如としているか、見てみようというのがこの小論の目的である。

「実際、この作品ほど多くの批評家たちから一様に称賛され、かつ異った解釈を加えられているアメリカの小説も珍しいだろう。批評というものの曖昧さと独断性を知るには『ハックルベリー・フィン』に関する批評を読むにかぎるとさえ思えるほどだ」³——これは 故元田脩一氏の言葉である。しかし、これはあながちここにあげられる批評家たちだけを一方的に責めるわけ

にもいかない。それというのは作家自身にもその咎が十分に認められるからである。元はと言えば “You don't know me without you have read a book by the name of *The Adventures of Tom Sawyer*; but that ain't no matter.”⁴ という *Huckleberry Finn* の冒頭文である。*Tom Sawyer* を読んでいなくても「そんなこたあ、問題じゃねえ」どころか、この前作品を熟読し Huck の性格をその中で正しく理解せずして *Huckleberry Finn* の正しい理解はとうてい望めない。元田氏の言う「曖昧さと独断性」は *Tom Sawyer* を無視または軽視した⁵ ことからきていると思われるからだ。

そこでこの小論では、とくにこの点を踏まえ、たえず *Tom Sawyer* に evidences を求めることにより、この「曖昧さと独断性」に陥らないようにつとめた。

1 Money 禍, Huck を襲う

Huckleberry Finn の中で Money 禍が最初に最も強烈な戦慄を Huck に与えるのは、Pap がやにわに大型ナイフを振りかざし、Huck 目がけて襲いかかり、あわや生命がという土壇場に Huck が立たされるシーンである。

“I begged, and told him I was only Huck; but he laughed *such* a screechy laugh, and roared and cussed, and kept on chasing me up . . . I thought I was gone.”⁶

Pap はものすごい形相で Huck を “Angel of Death” だと勝手に決めつけ、殺してやるとわめきながら、必死で逃げる Huck を追いつめる。これは正に “ransomed to death”⁷ である。Huck はこの意味さえ掴めず Tom に聞いてやっとなみこめる恐るべき Money 禍のひとつである。

Huck が受けるあとひとつの Money 禍は Widow Douglas 家での “civilizing” の形で Huck に降りかかる。この “civilizing” も生易しいものではないことが Huck は自ら経験してやっとなみこめる。その家に帰るよう説

得する Tom に Huck は言う。

Lookyhere, Tom, being rich ain't what it's cracked up to be. It's just worry and worry, and sweat and sweat, and a-wishing you was dead all the time.⁸

これまで「樽生活」life in the “sugar-hogshead” で Huck が満喫してきた “everything that goes to make life precious”⁹ をこれでふいにしてしまうばかりか、毎日 Huck はこの “sweat and sweat” の “sivilizing” の生活にしばりつけられ、特訓を受けさせられる。

そもそも *Huckleberry Finn* という物語の発端は “We got six thousand dollars apiece—all gold.”¹⁰ である。この \$6000 故に Huck は Widow Douglas 家での “sivilizing”, Pap の小屋での “ransomed to death” に遭わされる羽目になる。ここでの Huck の大きな誤算は, “Money is the symbol of civilization; civilization is the root of all evil.”¹¹ ということに気が付かなかったことだ。

ミシシッピ河岸にまどろむ 田舎町 St.Petersburg に飲んだくれの poor white, Pap, の棄児 Huck が思いもかけぬ大金 \$6000 を運び込んだばかりに、この町はそのまどろみから覚め、money-lust に燃え出し、町全体が狂う。この Money 禍が白人をひとり残らず総毟めにする悲喜劇が *Huckleberry Finn* であると言うことができる。

Widow Douglas 家で日々休みなく、四六時中、執拗に押し寄せる Money 禍に Huck はついに音をあげ、この Money さえなければと Money からの逃亡を思いつく。そして、Huck が最初の押し付け先に選ぶのが Tom である。

Tom, I wouldn't ever got into all this trouble if it hadn't 'a' been for that money; now you just take my sheer of it along with your'n, and gimme a ten-center sometimes—not many times, becuz I don't give a dern for a thing 'thout it's tollable hard to git.¹²

そして次の押し付け先が Judge Thatcher である。その時、この Judge に言う Huck の言葉は確かに変わっている。“I don't want it at all—nor the six thousand, nuther. I want you to take it; I want to give it to you—the six thousand and all.”¹³ これは利子もくそも Money と名の付くもの一切から一刻も早く逃れたいという Huck なの哀願の言葉だ。

さて災厄の元 Money という重荷を降ろし身軽になっての Huck の St. Petersburg からの逃走も並大抵のことではない。実に執拗な別の Huck 追跡、つまり村の白人たちの Money-malady のとぼちりが Huck にも及ぶからだ。

So vast a sum, all in actual cash, seemed next to incredible. It was talked about, gloated over, glorified, until the reason of many of the citizens tottered under the strain of the unhealthy excitement. Every “haunted” house in St. Petersburg and the neighboring villages was dissected, plank by plank, and its foundations dug up and ransacked for hidden treasure—and not by boys, but men—pretty grave, unromantic men, too, some of them. Wherever Tom and Huck appeared they were courted, admired, stared at.¹⁴

これほどまで money-lust で異常に過熱した St. Petersburg の白人たちには、Huck はもはや以前の “juvenile pariah”¹⁵ には見えない。はっと思わず息をのむほどの “the mass of yellow coin”¹⁶ に輝き、見るも眩しい存在に写るとしか言いようがない。その証拠に、Huck が Widow Douglas 家から無断で姿を消すと途端に大騒ぎとなる。Tom Sawyer 第35章では、まずは Widow Douglas が動転してあちこち飛び回り、丸まる2日間、Huck 探しに狂奔する。この失踪を聞き知った村の大人たちも一斉に動き出し、ミシシッピ河に繰り出し、Huck の死体がもしやと河浚えまでもする。それもこれだけで終らない。Huckleberry Finn 第8章で、Pap の小屋から Huck が居なくなるとわかるや、Pap, Judge Thatcher, Bessie Thatcher, Joe

Harper, Aunt Polly, Sid, Mary, その他, 大勢を総動員しての大々的な搜索団が組織され、一艘の船に乗り込み、Huck の死体探しに血眼になる。特にこの船には Huck の死体浮上に効き目があるとして大砲までも装備される。

They all crowded up and leaned over the rails, nearly in my face, and kept still, watching with all their might. I could see them first-rate, but they couldn't see me. Then the captain sung out: "Stand away!" and the cannon let off such a blast right before me that it made me deaf with the noise and pretty near blind with the smoke, and I judged I was gone. If they'd a had some bullets in, I reckon they'd a got the corpse they was after. Well, I see I warn't hurt, thanks to goodness.¹⁷

この余りと言えば余りの馬鹿ばかしさで Huck は、自分の所有する \$6000 の故に白人社会の重だつた人たちまでもが Money 禍の重症患者となり、見るも哀れな醜態を表わすのを見て、草葉の影から嘲笑するのだ。

これはしかし、この作品のほんの幕開の一場面にすぎない。Money 禍はミシシッピ河岸のひっそりとした村の隅ずみにまで深く侵蝕し、人びとのモラルを目立って低下させ、深刻な事態を次々に引き起す見せ場はこの後に続く。つまり Money 禍の特徴と見なされる robbing, killing¹⁸ がごく日常茶飯の出来事となってしまう一方で、その災厄の地からは外へ逃げ出そうにも逃げ出せないという窮状が、この作品の各章で次々に明らかにされていく。

2 Huck, Jim を一時 “borrow” する

さて以上見てきたように第7章までさんざん Money 禍にさいなまれ、死ぬ目にすら遭ってきた Huck が第24章から始まる Peter Wilks 事件では全くその立場を逆転、他人の \$6000 横領に加わるのだ。つい先ほど Money 禍に曝され死ぬほど苦んだばかりの Huck が今度は こともあろうにその加害者側に回って、見ず知らずの他人に同じ Money 禍を被せる。それもこの

被害者になるのは、伯父に死なれ、天蓋孤独の身になった自分と同じ境遇の orphans である。Huck のこの片や Money 禍の被害者であり、同時に片やその加害者になるという二重性を一体どう解釈したらよいのか。

これに答える鍵は Harold Beaver が最近出した彼の本の中で特に設けた “Huck and Pap” の章の中に見出せる。“To understand Huck one must begin with Pap. Pap is his one sure model. He often quotes the old man.”¹⁹ これは要するに、Huck の内に2つの矛盾する self が相住居することの指摘である。Huck はたしかに Pap の生き写しである。

. . . they tucked the old man into a beautiful room, which was the spare room, and in the night some time he got powerful thirsty and clumb out on to the porch-roof and slid down a stanchion and traded his new coat for a jug of forty-rod, and clumb back again and had a good old time; and towards daylight he crawled out again, drunk as a fiddler, and rolled off the porch and broke his left arm in two places, and was most froze to death when somebody found him after sun-up. And when they come to look at that spare room they had to take soundings before they could navigate it.²⁰

Huck も “respectable” になろうとはするが、いつの間には “low-down” にもどってしまう。Pap が “temperance” を皆の前で泣きながら誓うが、それもほんの束の間、喉がかわき、また元の “drunk as a fiddler” の状態にもどってしまうと同様、Huck も折角、 “a hot stove” 上の居たたまれぬ Widow Douglas 家の生活からうまく脱出できたというのに、またも内なる虫が騒ぎ出し、 “Tom Sawyer’s Gang” に加わりたさに、 “big-bug” の生活にもどってしまう。

“I won’t be rich, and I won’t live in them cussed smothery houses. I like the woods, and the river, and hogsheads”²¹ つまり、この言葉に

Huck の Huck たる所以が尽されている。Money 禍に足止めされ “sweat and sweat” に苦しめられる “them cussed smothery houses” は真っ平ご免だ、Money 禍のおよそ及ばない “the woods, and the river and hogs-heads” がおらの性に合う——これが Huck の本音である。ところが折々に Huck の内に流れる Pap の血が騒ぐ。この Widow Douglas 家への “里もどり” を初めに, “The House of Death” (第9章), “The Walter Scott” (第13章) といった “them cussed smothery houses” に Huck は次々に性懲りもなく潜入する。この Huck の2つの self の絶え間ない動きは mysterious としか言いようがない。悠々と流れるミシシッピ河の特性 “drifting” を思わせる self の交替・転換である。Peter Wilks 事件での Huck はほぼ前半分では “low-down” な little scoundrel の self が優勢を占めて活躍し、後半分足らずの所でやっと別の self, “respectable” な “gentleman” がそれに取って代る。

この複雑怪奇な 変わり身が見事に増幅されて写し出されるのが Huck の Jim “隠匿” である。先の \$6000 が Huck に偶然、転り込むように、Miss Watson 所有の黒人奴隷 Jim がこれまた全く偶然に Jackson 島にひそむ Huck の許に転り込む。この生きた property は時価 \$800 という “a big stack o’ money” である上に、これがもし逃亡する場合、生き身であろうと死体であろうと、額の差はあるが法外な懸賞金が付く。それだけに、この高価な “遺失物探し”, つまり、逃亡奴隷狩り、をめぐる Money 禍はものがあるため、深刻を極める。この深刻極まりない Money 禍が、選りに選って大河児 Huck²² を襲うのである。

Huck は Jackson 島で Jim に合うと、初めは喜ぶ²³。話し相手ができ、淋しさが紛らわせられるから。ところが、Jim の口から, “I-I run off.”²⁴ と打ち明けられて仰天する。その時はしかし、Huck 持ち前の lying で Jim には次のように言う。

... I'll stick to it. Honest *iniun*, I will. People would call me a low-down Abolitionist and despise me for keeping mum—but that don't make no difference. I ain't a-going to tell, and I ain't a-going back there, anyways.²⁵

この台詞にすでに Huck の「逡巡」が感じ取れる。この時点ではつまり Huck の Jim 救出の気持は全く定まっていない。そこで当然のこととして第16章に入って、Jim の待望の地カイロが近づき、“Dah's Cairo!”²⁶ と Jim が雀躍して叫ぶと Huck ははっと吾れにかえり、自分のしていることに愕然とする。こうして、ここからはっきりした形での Huck の「逡巡」が始まるのだ。

Jim said it made him all over trembly and feverish to be so close to freedom. Well, I can tell you it made me all over trembly and fevrish, too, to hear him, because I begun to get it through my head that he *was* most free—and who was to blame for it? Why, *me*.²⁷

それもそのはず、Jim の居場所をそのまま隠し、密告を怠ると、他人の奴隷を steal することになり、厳しい罪に問われるからだ。かと言って、密告すと、Huck が男として、人間として、Jim と交わした約束を破り、Huck の面子がたたない。Beaverの指摘するように、Huck は Pap の血を引き嗣ぎ“lying”と“stealing”とは得意中の得意とするところだが、その被害を受けるのが、ひとりには恩人 Miss Watson、ひとりには親しみを覚え始めた友人 Jim だということで Huck の呻吟は大きい。“I got to feeling so mean and so miserable I most wished I was dead.”²⁸ 白人で恩人の Miss Watson の方を立てるか、黒人で友人の Jim の方を立てるか、この苦しいジレンマに Huck は立たされる。

しかし、ここでの Huck の「逡巡」に僅かながら歯止めをかけたと思われるのは、その時 Jim が Huck に言う聞き捨てならない発言である。それ

は Jim が一度自由の身になるや直ちに取りかかる仕事は、彼の妻と2人の子供とを買いもどすこと、そしてその“商談”が彼らを所有する白人の奴隷主との間でまとまらない場合、Jim は“Ab'litionists”を傭って自分の子供たちを“steal”させるという言葉である。そうすると、自分が Miss Watson の奴隷を“steal”することが元になり、この種の“stealing”が連鎖的に起りかねないと Huck は思う。せっぱづまった Huck は Jim との約束の方を反古にする決心を固め、密告に出掛けようとする。しかし、Huck がいざカヌーを漕ぎ出そうとするその時に、Jim が Huck に“you's de bes' fren' Jim's ever had; en you's de *only* fren' ole Jim's got now.”²⁹という言葉をかける。その途端に Huck の思いつめた密告の気持がくずれてしまう。逃亡奴隷狩りの2人の男を前にすると、Huck は持ち前の lying で、その急場を乗り切る。こうして Huck は辛うじて Jim との関係を保ち、Jim の“de on'y white genlman dat ever kep' his promise to ole Jim.”³⁰にとどまれる。この時の明るい Jim の喜びとは全く対照的に、Huck の気分は冴えないし、暗い。ここでわれわれが見落としてはならない重要な点がある。それは Huck が、密告を決意し、“I felt easy and happy and light as a feather right off. All my troubles was gone.”³¹という清々した明るい気分ひたり切りにもなれないし、かと言って、密告せずに後にもどって感じる“feeling bad and low”³²という暗い気分苦しき通すでもない。彼持ち前の「逡巡」を経て、“I woudn't bother no more about it, but after this always do whichever come handiest at the time.”³³という割り切り方が Huck にはできるという点である。この一面無責任と言える Jim への態度が、そこに来た逃亡奴隷狩りのひとりと Huck が交わす会話に表われる。Huck のカヌーから離れ際に、その奴隷狩りの男が“If you see any runaway niggers you get help and nab them, and you can make some money by it.”³⁴と Huck に言うと、それにとっさに、“I won't let no runaway niggers get by me if I can help it.”³⁵という言葉が

Huck の口から飛び出す。その場その場で「逡巡」に「逡巡」を重ねる Huck の特性がここによく出ている。

3 Huck, やっと “slave-stealer” に踏み切る

Jim を “steal” するか、それとも密告して Miss Watson に返すか、この選択は Huck にとっては大問題となる。結局のところ Huck はそのままどっちつかずのまま放置し、時間は無為に過ぎる。しかしさすがに “lying” と “stealing” に長けた Pap の息子 Huck だけの心得はある。Jim のことを一切密告せず、一時そのまま頼被りする Huck なりの口実を前もって Pap から仕入れている。それは “it warn’t no harm to borrow things if you was meaning to pay them back some time.”³⁶ という Pap 口癖の持論である。この全く手前勝手な “stealing” 肯定論を耳にする Widow Douglas は当然強くこれに反発する。彼女は “it warn’t anything but a soft name for stealing, and no decent body would do it.”³⁷ と Huck を訓し、Pap のこの悪癖を真似しないように強く求める。しかし Huck は、他のことはともかく、“stealing” については Widow Douglas に背き、Pap に従う。それは Jim と “同捷” し、事実上 Jim を “steal” している自分の罪をできれば帳消しにしたい思いの Huck にして見れば、“slave-stealing” といえども実は “slave-borrowing” なのだと言い張る Pap 流の方がはるかに良心が痛まず、好都合だからである。

ただしかし Huck はここで一方的に、この勝手な Pap 流の “Jim-borrowing” 論によりかかるだけではない。このような事態になった責任の一端を Huck は Jim の所有主 Miss Watson に被せかけることも忘れてはいない。“Ole Missus—dat’s Miss Watson—she pecks on me all de time, en treats me pooty rough, but she awluz said she wouldn’ sell me down to Orleans.”³⁸ と Miss Watson の “口の折檻” と、約束を反古にした不実を訴える Jim の言葉を Huck は落さず記すだけに止まらない。Huck

はさり気なく、“sometimes I lifted a chicken that warn't roosting comfortable”³⁹と自らの chicken 泥棒の話をさしはさみ、この chicken 同様、「居心地よく、ねぐらについておれなかった」奴隷 Jim へのひどい仕打のことで、Miss Watson の責任を暗に追求している。

このようにしてともかく Huck の“Jim-borrowing”はえんえんと第31章の所まで続く。すでに述べたように、Miss Watson から奴隷 Jim を“steal”しているのではなく、一時的に“borrow”しているのだということで押し通し、ともかくも Huck は、“I warn't to blame.”⁴⁰と澄ましていた。

ところが、このようなごまかしがいつまでも長続きするはずがない。第31章に入ると、King が Huck の留守の間をねらって、Jim を Silas Phelps に売りとばすという事件が起る。Huck は心秘かにずる賢く、折を見計って Miss Watson に返したら、それで済むと、それまで高を括っていただけに、Huck のショックは大きい。Jim という Miss Watson の奴隷を一時“borrow”したとは表向きのこと、実は“steal”してきた“高価な盗品”が King の手により Silas Phelps に売られてしまった以上、Huck の打つべき手は Silas Phelps から Jim を文字通り“steal”するという一手だけが残されたからだ。そこで Huck は当然にして進退極まる。よし、それじゃ“slave-stealer”になろう、と Huck は決心する。ここにきてやっと Huck は、内なる「逡巡」する self を抑え、“steal out of slavery”⁴¹という Huck らしからぬ決心をすることになる。

“All right, then, I'll go to hell”—and tore it up. It was awful thoughts and awful words, but they was said. And I let them stay said; and never thought no more about reforming”⁴²

この Huck の言葉ほど多くの批評家たちが挙って取り上げ、これぞ Huck が Jim 救出の気高い決意を示すクライマックスだと高めた箇所は他にはあ

るまい。しかし果たしてそうであろうか。ここで Huck が特にしたことと言えば、ただ Jim の居場所を知らせる Miss Watson宛ての自分で書いた手紙を自分で破り、反古にしたというだけのことだ。実際、Huck がこの“Jim-stealing”という仕事に、口と手以外で、どれほど必死になって体ごと打っつかっていったかと見てみると、実に佻びしい限りである。Huck はなるほど口では “I’m a-going to steal him.”¹³ と言い放つが、いざ “Jim-stealing” という汚れ仕事にかかる段になると、Huck は一向に表舞台には立とうとはしない。終始、Huck は Tom の影に居て、こそこそと端役・裏方で通す。ただひとつだけ、Huck の行動で賞められることがある。それは “book-making” の仕事である。Tom が Baron Trenck, Casanova, Benvenuto Chelleeny, Henri IV¹⁴ など数々の脱獄物語にかぶれ、これらに記された脱獄の手口、道具、手順などをそのまま “Jim-stealing” に持ち込もうとするのを、Huck はさして逆わず、その真実をひたすら正しく書き止める book-maker に徹しようとする。ただここでも見落してならないことは、この “book-making” という Huck にとって唯一と思える仕事ですら、
“If I’d a knowed what a trouble it was to make a book I wouldn’t a tackled it, and ain’t a-going to no more.”¹⁵ と Huck はぼやき、面倒くさがることである。

4 Phelps Farm episodes の意味

Tom が第32章以降から最終章にかけて、いかにも唐突に再登場し、こともあろうに “Jim-stealing” という重大な事件に大きく関わり、肝心の Huck をほとんど端役に押しつけてしまい、しかもその “Jim-stealing” を Tom 一流のどたばた救出劇にすり替えていることについて、従来から批評家の間で白熱した議論が行なわれてきた¹⁶。そのあげく、この Phelps Farm episodes は不要な部分である、読む必要がないという意見すら出た。果たして、この12章にもわたる episodes は *Huckleberry Finn* の中で削除すべき、意味の

ない、余計な箇所なのだろうか。

これから、この問題を Money 禍の観点から取り上げ、いま一度考え直してみよう。ただしここで導き出そうとしている結論は、先に言おう。それは Phelps Farm episodes はこの作品の中で不要であるどころか、必須不可欠な要素だというものである。

“Mr. Mark Twain” のこの作品構成は実に入念で、精巧を極めている。中でも Phelps Farm episodes 創作に当っては Twain の並々ならぬ思想と技巧とが織り込まれ、苦心の跡が容易にうかがえる。Twain はこの作品で特に Money 禍による人間関係の歪みを明示しようとして、2つの episodes, “Huck・Jim Raft episodes”⁴⁷ と Phelps Farm episodes, をそれぞれ前（第8章—第30章）と後（第31章—最終章）とに配置したと思われる。さてそこで Twain はこれら前部と後部とのコントラストをできる限り鮮明にすることにより、Money 禍の浸蝕度をより正確に写し出そうとした。つまり、前部は、Money 禍のほとんど及ばない大河の筏上生活で自然に醸成される白人・黒人関係を扱う episodes とし、後部はそれに対して Money 禍に冒され、ただれた南部の綿花農場で slavery に歪められた白人・黒人関係をむき出しにする episodes という風に Twain は予めデッサンしたと考えられる。

しかし、これらいずれの設定にせよ、当時のアメリカ人には、たとえ自由州に属していようと、奴隷州に属していようと、実にショッキングな設定であったことくらいは容易に想像がつく。そこで Twain はこれら対極的な場で、黒人と関わりをもつ白人にどのような人物を当てたものかと頭を痛めたにちがいない。たとえミシシッピ河の筏上であれ、黒人奴隷、それも逃亡奴隷と“同捷”する白人となれば、白人社会に容れられない、爪弾きされ、毛嫌いされる“hog”同然の outcast でなければならない。そこで “the juvenile pariah of the village”,⁴⁸ “son of the town drunkard”⁴⁹, “the romantic outcast”⁵⁰ の Huck の登用となる。こうして出現する Huck と逃亡奴隷

Jim との“同棲”生活は当時の白人社会にはたしかにショッキングな設定であったろうが、後部の場合と比べれば、ほとんど問題にはならなかったろう。というのは、Huck も Jim も St. Petersburg の Money 禍の犠牲者だからだ。Money-lust に目がくらんだ白人たちの狂乱故に、それぞれに身の危険を感じ、St. Petersburg 脱出に踏み切る二人だからである。ところが、この後部の設定は St. Petersburg の“respectable boys”の一人、Tom が、こともあろうに当時の超過激分子 Abolitionists ばりの slave-stealing に走るというのだから、ただショッキングどころの話では収まらない。このことは“*I'll help you steal him!*”⁵¹ とする Tom の言葉に仰天する Huck の態度・独白によく表われている。

Well, I let go all holts then. like I was shot. It was the most astonishing speech I ever heard—and I'm bound to say Tom Sawyer fell considerable in my estimation. Only I couldn't believe it. Tom Sawyer a *nigger-stealer!*⁵²

この危険極まりない slave-stealing をどう描くか。“Mr. Mark Twain”は“*told the truth, mainly.*”⁵³ の面手にかけて、この真相をできるだけ抵抗なく描くために、活動家 Tom を前面に出し、その介添役・語り手として Huck を当て、そして自らは読者の目に全く止まらない舞台裏にひそむという巧妙な物語構成を採った。

その上さらに Twain はこれだけでは尚十分ではないとして、この“slave-stealing”を“Tom Sawyer's Gang”の遊び、“黒んぼ盗みごっこ”にすり替えたが、それでも万全だとは思わなかった。そこで“Mr. Mark Twain”の“*stretching*”の妙技の限りを尽して、この“黒んぼ盗みごっこ” Phelps Farm episodes, をできるだけ馬鹿ばかしく、そして、できるだけ読む者をうんざりさせるように仕上げたと思われる。従って、後でこの Phelps Farm episodes が“*just cheating*”⁵⁴ の箇所だときき下ろされ、また“茶番劇”に

すぎないと一笑にふされることを、Twain は予め重々読んでいたはずである。こういう風に見ていくと、Phelps Farm episodesこそ、*Huckleberry Finn* の主要部で、“Huck・Jim Raft episodes”よりも重要な要素であることがわかるであろう。

さてそれでは *Huckleberry Finn* の中での Phelps Farm episodes の重要性について、いまいし詳細に見てみよう。

この episodes を通じて始めて明瞭に黒人奴隷 Jim に対する態度・人情面での Huck と Tom との違いが示される。第33章の初めで Huck が Tom に“Jim-stealing”のことを初めて洩らす箇所、Huck は“I’m a-trying to steal out of slavery.”、“I’m a-going to steal him.”⁵⁵と繰り返し明言するのに対して、Tom は“I’ll help you steal him!”⁵⁶と答え、次の第34章でも“Didn’t I say I was going to help steal the nigger?”⁵⁷と繰り返す。このことは Huck が Jim 救出そのことに打ち込む決意を表わすのに対して、Tom はただその Huck の救出を“help”する、つまり直接自らは“steal”しない、と言う。この Huck の自ら Jim を“steal”しようとする姿勢と、Tom のその“help”に終る姿勢との差が、Phelps Farm episodes 全体の基調になっている。Huck にとって Jim の問題は実に serious な問題で、“I would die of miserableness”⁵⁸とまで言い、そのことで実に深刻に悩む。しかし Tom にとって Jim はただのなぶり者にする対象にしかすぎない。第2章の所で、“Tom . . . wanted to tie Jim to the tree for fun.”⁵⁹そこで Huck が Tom をたしなめはするが、この態度がそのまま Phelps Farm episodes にまで持ち込まれ、あの Tom の Jim 救出茶番劇になっている。このどたばた救出劇が終わってうそぶく Tom の“I wanted the adventure of it; and I’d a waded neck-deep in blood to.”⁶⁰の言葉に、この Tom の破廉恥が見事に浮き彫りにされている。

Huck は Jim との筏下りの旅の間に、ある時は裏切り、ある時は助けられ、ある時は互いに慰め合いながら親交を深めていき、Jim に心から“de

bes' fren'⁶¹ と呼ばれるほどになる。ところが Tom はと云えば Jim との関係は終始 変わることはない。Tom に対する Jim の呼称は “Misto Tom” か “Mars Tom Sawyer” かで通される。しかし、Jim は腹の底では Tom を “trash”, つまり、改心以前の Huck 同然、見下げ果てた “人間のくず” と思ったに違いない。その理由はこうだ。Jim の方からの Tom に捧げる真情、信頼はこの言葉に明らかである。

“Say it, Jim.”

So he says:

“Well, den, dis is de way it look to me, Huck. Ef it wuz *him* dat 'uz bein' sot free, en one er de boys wuz to git shot, would he say, 'Go on en save me, nemmine 'bout a doctor f'r to save dis one?' Is dat like Mars Tom Sawyer? Would he say dat? You *bet* he wouldn't! Well, den, is *Jim* gywne to say it? No, sah—I doan' budge a step out' n dis place 'dout a *doctor*; not if it's forty year!”⁶²

ここで Jim は Tom の生命を救うためなら、自分の長年の夢であった自由ですら諦め、自らの生命すら Tom に捧げようと言うのに、Tom の Jim に対する態度はどうか。Jim をたぶらかすだけに満足せず、Jim の生命すらももて遊ぼうとする非道・暴挙に出るのだ。Tom は二か月も前に Miss Watson は死に、いまわの際に Jim を \$800に目がくらみ、川下に売ろうとしたことを悔み、遺言で Jim を自由の身にしたということを知っていながら、それを隠した上で、Jim にまるで生き地獄のような辛い目に遭わせる。“I've seen it in books; and so of course that's what we've got to do.”⁶³ ということ、Jim の嫌いな鼠、蛇、蜘蛛をかき集め、それらを Jim の監禁小屋に入れるという愚弄・たぶらかしの限りを尽す。それなのに Tom は Huck のように “I didn't do him no more mean tricks, and I wouldn't done that one if I'd a knowed it would make him feel that way.”⁶⁴ という気にはとうていなれない。いや、それどころか Tom はもともと初めから

自由であった Jim を馬鹿骨を折って自由にして後、どうするつもりだったのかと Huck が尋ねると、こう言う。

And he said, what he had planned in his head from the start, if we got Jim out all safe, was for us to run him down the river on the raft, and have adventures plumb to the mouth of the river, and then tell him about his beieng free, and take him back up home on a steamboat, in style, and pay him for his lost time, and write word ahead and get out all the niggers around, and have them waltz him into town with a torchlight procession and a brass-band, and then he would be a hero, and so would we. But I reckoned it was about as well the way it was.⁶⁵

これほど愚弄の限りを尽して Tom が Jim に支払う代償は \$40 である。Huck は濃霧の折、別々に激流に押し流され、筏に無事たどり着き、Jim をたぶらかした時に、Huck は怒る Jim に白人としての面子を一切棄てて謝るが、Tom にはそれができない。いや、黒人に謝ることなど思いもつかないくらい、Tom は Money 禍に毒され、Jim を一人の人間として見るができないのだ。こういう Tom であるだけに、普通であれば最も感動的な Tom の言葉 “They hain't no *right* to shut him up! *Shove!*—and don't you lose a minute. Turn him loose! he ain't no slave; he's as free as any cretur that walks this earth!”⁶⁶ もただ白じらしく響くばかりである。

以上、見てきたので明らかなように、Tom は Money 禍で人間の基本的モラルを失い、黒人の暖い情に対して Money でしか応えられない白人の大人たちの見事な体现者として、この作品のしめくくりの場に、再登場しなければならなかったのだ。白人は、Tom に典型的に見られるように、黒人に対しては普通の恩義さえ感じるができない “trash” であることを示す Phelps Farm episodes は *Huckleberry Finn* という Money 禍物語の結びとして不可欠な episodes なのだ。

結

しかしここで最後に見過してならないのは Huck に崇りつづけた \$ 6000 のことである。一体なぜ、あれほどまで執拗に崇りつづねばならないのか？ それは Huck の \$ 6000 がただ普通の不浄・不正の金とは違い、深い怨念がそれに込められていたからである。この元の持ち主 Injun Joe が Robinson 医師の墓発きに働われ、前金を受け取っている上に要求しようとしてもめ、その白人の医師を Potter のナイフで突き刺して殺す直前に Joe が吐く啖呵はこうだ。

“Five years ago you drove me away from your father’s kitchen one night, when I come to ask for something to eat, and you said I warn’t there for any good; and when I swore I’d get even with you if it took a hundred years, your father had me jailed for a vagrant. Did you think I’d forget? The Injun blood ain’t in me for nothing. And now I’ve got you, and you got to *settle*, you know!”⁶⁷

とすると、この殺害事件はいわば医師 Robinson 父子と Injun Joe の “feud” 故の惨劇と見ることができよう。それだけに止まらない。この “feud” は大きく白人対インディアンとの間の長い因縁の確執と受け取ることも可能である。Injun Joe が、おそらく白人と推測できる故人の墓を発く仕事を引き受けたのも、言いがかりをつけて結局は Robinson 医師を殺してしまうのも、そして、その殺人の罪を白人の相棒 Potter に被せ、間接的に Potter を縛り首にしようとするのも、すべて白人に対する Injun Joe の並々ならぬ怨念の故だと考えられはしないか。しかし Injun Joe のこの白人への復讐は Tom の劇的な証言で果たされない。そればかりか Injun Joe は、自分の最後の隠家 McDougal の cave が、St. Petersburg の白人の大人たちによって大きなボイラー用の鉄板で塞がれてしまう。つまり、その cave がいつの

間にか“prison,”それも頑丈極まりない「石牢」と化し、Injun Joe はそこから出ようにも出られず、哀れ、悲惨な死にざまを白人の前にさらす。この Money 禍に祟られ、非業の最後をとげる Injun Joe の見るも哀れな“death in the cave”は *Huckleberry Finn* の扱う南北戦争前のアメリカで特に夥しい数のインディアンたちが荒地に幽閉され、死んでいった“death in the reservation”の悲劇⁶⁸を、われわれは思い起こす。

この幽閉・惨死という宿命は Jim にも違った形でおとずれる⁶⁹。King, Duke の許での軟禁・川下への売却, Silas Phelps の小屋での監禁・死の脱獄, である。Miss Watson の遺言を告げる Tom の一言がもし仮りになかったとしたら, Injun Joe と同じ死の運命にさらされたかもしれまい。

かつて旧世界が古い伝統にただれ、形ばかりの God 崇拝に堕している姿に絶望し、はるばる大西洋を渡り、新天地に夢を抱いて来たというのに、“Money is God.”とキリスト教のGodを冒瀆し、インディアン掃討、黒人を property とする slavery 制度の確立、と白人みずからの滅びの道を開いた。こういう趣旨の Money 禍物語が *Huckleberry Finn* であると言うことができる。

こういう観点に立って初めて、“October 12, the Discovery. It was wonderful to find America, but it would have been more wonderful to miss it.”⁶⁹ という *Pudd'nhead Wilson's Calendar* のもつ真意がわれわれ読者に言いようもない迫力をもって迫ってくるのだ。

注

この小論は日本アメリカ文学会1986年度関西支部大会フォーラムにおいて発表したものに大巾加筆、補正を施し、当木村俊夫先生御退職記念号に寄せたものである。

- 1 J. Kaplan, *Mr. Clemens and Mark Twain* (New York: Simon & Schuster, 1966), p. 96. ここでの Kaplan の言葉は重要。この短い言葉で Kaplan は *Packard's Monthly* の3月号に出た“Open Letter to Commodore Vanderbilt”, 1871年9月27日の *New York Tribune* に載った“The Revised Catechism”, *The Gilded Age*

(1873), *£1,000,000 Bank Note* (1893), *\$30,000 Bequest* (1906)などを扱っ所に、TwainのMoney観をもの見事にまとめている。

- 2 “sex ポルノ”, 1行下の“money ポルノ”, 共に筆者の造語。
- 3 元田 脩一, 『エデンの探求——アメリカ小説の一特質』(東京: 開文社, 昭38), p. 135.
- 4 M. Twain, *Mark Twain's Works*, Vol. XIII (New York and London: Harper & Brothers, 1906), p. 15. 以下の同全集からの注については *MTW* の略号を用い, その後に巻数, 頁数を示す。
- 5 *Tom Sawyer* の無視または軽視はこの作品研究の論文数で歴然としている。T. A. Tenny, ed., *Mark Twain: A Reference Guide* (Boston: G. K. Hall & Co., 1977) によると1965-1972期間で, *Huckleberry Finn* の論文枚193に対し *Tom Sawyer* の論文数は35.
- 6 *MTW*, Vol. XIII, p.51.
- 7 *Ibid.*, p. 25. この“ransom”の意味解きは *Tom Sawyer* (*MTW*, Vol. XII, pp. 307-8) にも次のように出てくる。
 “What's a ransom?”
 “Money. You make them raise all they can, off'n thejr friends; and after you've kept them a year, if it ain't raised then you kill them. That's the general way. Only you don't kill the women. You shut up the women, but you don't kill them. They're always beautiful and rich, and awfully scared. You take their watches and things, but you always take your hat off and talk polite. They ain't anybody as polite as robbers—you'll see that in any book. Well, the women get to loving you, and after they've been in the cave a weck or two weeks they stop crying and after that you couldn't get them to leave. If you drove them out they'd turn right around and come back. It's so in all the books.”
- 8 *MTW*, Vol. . XII, p. 324.
- 9 *Ibid.*, p. 71.
- 10 *MTW*, Vol. XIII, p. 15.
- 11 R. B. Salomon, *Twain and the Image of History* (New Haven: Yale University Press, 1961), p. 194.
- 12 *MYW*, Vol. XII, p. 32.
- 13 *MTW*, Vol. XIII, p. 34.
- 14 *MTW*, Vol. XII, p. 320.
- 15 *Ibid.*, p. 70.

- 16 *Ibid.*, p. 319.
- 17 *MTW*, Vol. XIII, p. 63.
- 18 *Ibid.*, p. 24. “Tom Sawyer’s Gang” の襲撃が即 St. Petersburg の Money 禍となっていることに注意。次の Ben Rogers と Tom の会話を参照のこと。
- “Now,” says Ben Rogers, “what’s the line of business of this Gang?” “Nothing only robbery and murder,” Tom said.
- 19 H. Beaver, *Adventures of Huckleberry Finn* (London: Allen & Unwin, 1987), p. 79.
- 20 *MTW*, Vol. XII, p. 42-3.
- 21 *MYW*, Vol. XII, pp. 324-5.
- 22 拙著『マーク・トウェイン論究』（東京：篠崎書林，昭53）pp. 103-131を参照。
- 23 *MYW*, Vol. XIII, p. 67. “I was ever so glad to see Jim. I warn’t lonesome now.”
- 24 *Ibid.*, p. 68.
- 25 *Ibid.*, p. 69.
- 26 *Ibid.*, p. 126.
- 27 *Ibid.*, p. 125.
- 28 *Ibid.*, p. 126.
- 29 *Ibid.*, p. 127.
- 30 *Ibid.*, p. 127.
- 31 *Ibid.*, p. 126.
- 32 *Ibid.*, p. 129.
- 33 *Ibid.*, p. 130.
- 34 *Ibid.*, p. 129.
- 35 *Ibid.*, p. 129.
- 36 *Ibid.*, p. 97.
- 37 *Ibid.*, p. 97.
- 38 *Ibid.*, p. 69.
- 39 *Ibid.*, p. 96.
- 40 *Ibid.*, p. 125.
- 41 *Ibid.*, p. 293.
- 42 *Ibid.*, p. 279.
- 43 *Ibid.*, p. 293.
- 44 *Ibid.*, p. 309.
- 45 *Ibid.*, pp. 374-5.

- 46 B. A. Marks, ed., *Mark Twain's Huckleberry Finn* (Boston: D. C. Heath & Co., 1959) がこの論争を知るには便利。
- 47 “Huck・Jim Raft episodes” は筆者の造語。“The Raft episode” と混同せぬこと。
- 48 *MTW*, Vol. XII, p. 70.
- 49 *Ibid.*, p. 70.
- 50 *Ibid.*, p. 71.
- 51 *MTW*, Vol. XIII, p. 293.
- 52 *Ibid.*, p. 293.
- 53 *Ibid.*, p. 15.
- 54 If you read it (*Huckleberry Finn*) you must stop where the Nigger Jim is stolen from the boys. That is the real end. The rest is just cheating. (Ernest Hemingway, *Green Hills of Africa*, London: Jonathan Cape, 1962, p. 29) 文中の下線は筆者。
- 55 *Ibid.*, p. 293.
- 56 *Ibid.*, p. 293.
- 57 *Ibid.*, p. 303.
- 58 *Ibid.*, p. 126. この同じパラグラフの初まりも “I got to feeling so mean and so miserable I most wished I was dead.” とあり、Huck の苦悩の深さが特に際立っている。
- 59 *Ibid.*, p. 21.
- 60 *Ibid.*, p. 370.
- 61 *Ibid.*, p. 127.
- 62 *Ibid.*, p. 353.
- 63 *Ibid.*, p. 25.
- 64 *Ibid.*, p. 123.
- 65 *Ibid.*, p. 373.
- 66 *Ibid.*, p. 369.
- 67 *MTW*, Vol. XII, p. 105.
- 68 Twain は1882年、彼の Notebook に
U.S. Government:
 We have killed 200 Indians.
 What did it cost?
 \$2,000,000.
 You could have given them a college education for that.

と書き記すだけでは、政府のインディアン掃討・虐待・殺戮政策への抗議が十分でな

いと考へ、1885年、つまり、*Huckleberry Finn* がアメリカで出た年に、当時の大統領 Cleveland に対して、強力なインディアン保護政策をとるよう、实例に基づいて強く求めた。このことについては Philip S. Foner, *Mark Twain Social Critic* (New York: International Publishers, 1958), pp. 236-8. を参照。

69 黒人に対する白人の虐待・リンチ・殺害について Twain が1869年8月に Buffalo *Express* に“Only a Nigger.”のタイトルで抗議文を載せたことを皮切りに、次々に白人の私刑集団に対する痛烈な攻撃を行なったことを Foner は前掲書の pp. 218-221. で明らかにしている。

69 *MYW*, Vol. XIV, p. 223.

Synopsis

"Money-malady" in *Huckleberry Finn*

Yorimasa Nasu

Critics disagree about the relation of the Phelps Farm episodes to the theme and structure of *Huckleberry Finn*. Many seem to slight the importance of money, its image, and its related synonyms used so abundantly in this book. Freedom in this book specifically means freedom from "money-malady." Huck has decided to steal Jim, Miss Watson's property worth \$800, out of slavery, while Tom holds out on Jim, who had been freed two months ago. The contrast of attitudes toward slavery between the two boys unites all aspects of the book.

Huckleberry Finn represents Mark Twain's creed: "Vast wealth, acquired by sudden and unwholesome means, is a bane." The book begins with Huck's finding the "big stack o' money" of \$6000 which destroyed the body and soul of St. Petersburg inhabitants, and ends with his decision of "lighting out for the territory," hating himself seized with the sudden riches' disease.

Ordeals which seized Huck who had been suddenly elevated from "the juvenile pariah" to a little millionaire are roughly divided into the two sorts, civilizing and theft. Pap and other villagers have mercilessly denied his personality, and tried to rob him of his treasure of \$6000, or of his restful sleep and peace of mind. The sudden

riches all of a sudden put him into the miserable condition of being "ransomed to death" in many ways, and then, becoming impatient of the oppression, he ventures to leave the village, never to return, making it seem that he had been murdered by a robber.

The money-malady was spread so widely that even Miss Watson was infected by it. The big money of \$800 offered for her slave Jim tempted her so strongly that she came to harden her heart, and thinks of selling Jim down the river. After all, Huck and Jim have been obliged to escape for life from St. Petersburg, seriously victimized by the money-malady there.

Huck too is only human, and also vulnerable to the malady. In the Peter Wilks episodes, he has helped the scoundrels, King and Duke, to steal \$6000, the same sum of money he had gained, from three helpless orphans. By examination of many disappointing actions of his there, we can see that Huck is "playing double"; he is a thief and a victim of thieves.

Huck happens to see Jim at Jackson's Island after his escape from Miss Watson and Pap, and to face the serious problem of deciding whether or not he should steal Jim, "wuth o' \$800," from Miss Watson. At that critical moment, Huck well knows how to justify the theft, for Pap taught the son: "it warn't no harm to borrow things, if you was meaning to pay them back, some time." Huck implies that he "borrowed" the "run-away nigger" of Miss Watson's "that warn't roosting comfortable" under her care, and that when the chance comes, he may return the "nigger" to her. The chance has come, but the returning comes to be impossible; the two scoundrels, in his absence, had sold Jim to Silas Phelps for "forty *dirty* dollars." Then, he has been driven to the

last wall, and made a noble decision of "stealing Jim out of slavery," giving up his irresponsible attitude of the temporary "borrowing." Living their raft life together on the Mississippi, Huck and Jim have become so closely related to each other that in the eyes of Jim, Huck has come to be "de bes' fren'," far from being "a trash," and Huck himself comes to find a "father" in Jim.

Tom is almost a perfect specimen of the dominant culture of the slave-holding society. What he can do for Jim's freedom is only "pretending" to help it. "Forty *dirty* dollars" is all that connect Tom with Jim, as well as the same sum of money was all that connected King and Duke with Jim. The Phelps Farm episodes are important; it is only through the episodes that we learn about the society's attitude toward slavery.

"Mr. Mark Twain" had to pose as a popular writer who rigidly observes the respectable code of the white gentlemen; he had to be on guard lest the book ends with Huck's triumph over the slave-holding society. In other words, Twain succeeded in finding a neat device for ending the book; showing that the limit of the white men's actions for the run-away slave is the death-bed freeing of the slave.